Interview

サッカー指導者 綾部 美知枝さん

Jリーグ十二チームで唯一、親企業を持たず、市民が支える清水エスパルス。その清水の町で二十年以上サッカーの指導に携わっている女性がいます。

●綾部美知枝（あやべみちえ）さん

1948年11月4日、静岡県清水市生まれ。69年に日本体育大学短期学部を卒業後、小学校教員の傍ら、「清水FC（フットボールクラブ）」にてサッカーの指導に携わる。今年4月教職を退き、清水市教育委員会指導主事として「サッカーのまち推進担当主幹」となる。その他、清水市サッカー協会副理事長、静岡県サッカー協会理事、同第五種（女子）委員長、日本サッカー協会第四種（少年）委員、同第五種（女子）委員を務めている。家族は警察学校の教官の夫と、高校1年、小学校6年の二男がいる。

昨年五月に開幕したJリーグにより、サッカーブームに火がつきました。清水エスパルスの活躍に湧く清水市は、高校日本一の清水市立商業高校も抱える〝サッカー王国〟です。その〝王国〟を築きあげた功労者の一人が、綾部美知枝さん。二十年以上にわたり、小学校教諭をしながら、市民サッカークラブ「清水FC」で子供たちをはじめママさんチームなどにサッカーを指導してきました。小学生チームの選抜選手による「清水FC」の初の女性監督でもあります。

教え子はJリーガー

――綾部さんはたくさんのJリーガーを育てられたそうですね。

「清水エスパルスの堀池（巧）、長谷川（健太）、大榎（克己）、それからサンフレッチェの風間、ベルマーレに行った反町たちがいます。Jリーグで応援しているのはもちろん基本的にはエスパルスですが、どのチームにもだいたい教え子がいるので、どこも応援できて楽しいですよ」

――清水の三羽烏といわれる三選手（堀池、長谷川、大榎）はどんな子どもだったのですか。

「カツミ（大榎）は私が小学校時代に担任を受け持ったこともあるのですが、リーダーシップのとれるやさしい子でした。プレーの上ではそれが欠点でもあるんですけどね。

ケンタ（長谷川）は自他ともに認める実力ナンバー1でしたが、カツミと出会って相手の実力を素直に認めることを学びましたね。

タクミ（堀池）は努力家です。たまたま一人、選手がケガして『試合に出たい子は？』とみんなに聞いたとき、彼の目がいちばん輝いていたんです。『この試合で活躍したらレギュラーにする』と約束して送りだしたら、彼は本当に活躍してそれ以後レギュラーになりました」

――綾部さんの指導のポリシーは。

「好きなサッカーを介して、子どもを心身ともに強い人間に鍛え上げたいということです。サッカーを離れたときでも、一人の人間としてきちんとしていること。基本は、親に『サッカーを辞めなさい』といわれないように、ふだんの生活から自分に厳しい人間であってほしいと思っています」

――成長した選手は、今度は子どもたちのいい手本になっていくということですね。

「そうですね。カツミ（大榎）たちはよく子どもたちの練習に顔を出してくれるんです。自分たちの後継者を育てるんだという意識があるのかもしれません。子どもたちのほうもそれがわかるのか、彼らのサインをもらうことより彼らのボールを蹴ることを喜びます」

――子どもたちを指導していていちばん嬉しかったことは何ですか。

「卒業させてからも共通の話題、〝サッカー〟を語り合えることですね。教え子の一期生はもう、エスパルスのトレーナーやユースのコーチ、それから教師となって清水に戻ってきています。

カツミたちは家族連れでよく私の家に遊びに来るんです。そのとき奥さんから聞いたのですが、遠征にいくときは自分で荷づくりをしているんだそうです。有名選手になっても子どものころの指導がちゃんと生きていることがわかって、嬉しかったですね」

――綾部さんがサッカーに足を踏み入れたキッカケは何ですか。ご自身も以前、プレーをされていたのですか。

「私は学生時代、陸上をやっていました。それが小学校の教員になってまだ間もない頃、子供たちにサッカーしようよと誘われたんです。『ボールを白い枠の中に入れたら先生の勝ちだよ』という子供たちの言葉は、単純ですが、まさにサッカーの本質をいいあてたものだと思いました。やってみると全然ボールが蹴れなくて、それで昭和四十八年にコーチングスクールに通いました」

――女性は何人いましたか。

「私だけです。他の受講生は全国レベルのサッカー・エリートの男性ばかり。でも、みなさん私のことを温い目で見てくださいました。毎週月曜日に実技と講義が一時間ずつで一年間続きました。その後に清水FCの指導スタッフにならないかと誘われたわけです」

――少年チームのほかにママさんチームなども教えていらっしゃるとのことですが、それぞれに指導法が違うのですか。

「違いますね。ママさんたちはどうしても勝負にこだわりやすいので、〝温かい指導〟を心がけています。

女の子には、スピードを落としたりすると逆に『男の子と一緒にして』と言われるんです。ですからできるだけ同じように扱うようにしています。ただ練習が終われば、言葉づかいは女の子らしくとはいっています」

――サッカーの何がそんなに綾部さんを魅きつけるのでしょう。

「生涯スポーツであり、ファミリースポーツにもなるサッカーを通じての〝ヒューマン・チェーン〟でしょうか。子どものため、世の中のため、それがひいては自分のためになっているんですよね。子どもたちに教えながら逆に自分が教わっているんだと思います」

▲3歳児の指導をしている綾部さん

――いままで、女性指導者ならではの悩みは何かありましたか。

「いちばんつらかったのは出産でサッカーができなかったときですね。産休をもらっていながら、サッカーの練習に出ていくわけにはいきませんから。実際、隠れてボールを蹴ったこともあります。(笑)ですから産休は(最低限の)三カ月しか取りませんでした」

――この四月からは先生をやめられ、市の職員(清水市教育委員会指導主事)として〝新天地〟に移られたそうですね。

「清水市は全国に先駆けて『サッカーをキーワードにした街づくり』を打ち出しました。そして市長さんから直々に『サッカーのまち推進担当』を依頼されました。先生という仕事は大好きでずっと続けたかったのですが、街づくりの基本というのは〝子どもを育てること〟につながると思って、引き受けました。〝サッカーのまち〟として、ソフトとハードの両面から充実させていきたいと思っています」

――日本サッカー協会の女子委員も務められていますが、今後の日本女子サッカーに期待することは。

「女子サッカーは今がスタートで、先輩がいないわけです。ですから後に続く人の夢になれるようになってほしいと思います。スター選手がほしいですね。女子が伸びれば男子も刺激される。そうやって、お互いに刺激し合ってほしい。世間は何かと〝J〟ブームですが、女子の〝J〟でもあるわけです」

――お仕事とサッカーの指導、そして妻、母と一人で何役もこなして、気持ちの切り換え等、いろいろたいへんでしょう。

「土・日曜も休めませんし、夏休みや冬休みも遠征や大会で出かけることが多いんです。でも、時間が余ってしまうほうがかえって疲れるんです。欲張りですから、人の二倍にも三倍にも生きたいと思っています」

――ご主人もサッカーをなさっていたのですか。またお子さんは?

「主人は日体大時代の同級生で、水球をやっていました。いまは警察学校の教官をしていますが、教えるという共通項がありますから私を理解してくれています。上の子(高一)はいまサッカーをやめていますが、下の子(小六)は長谷川みたいな選手になるんだといっています。いま清水FCで私のチームにいます。本人に対してかわいそうなのは、選手の起用では、私は息子と同じ実力の選手がいたら、そちらを試合に出します。息子にはその後、フォローしておきますが…(笑)」

――これからの抱負を。

「いまのままで、これからも背伸びせず、できる範囲でエンドレスに続けていきたいです」

◇

はじめは「綾部さん」とお呼びしていたのが、インタビューが進むにつれいつの間にか「綾部先生」とお呼びしていました。大らかで温かい綾部先生。卒業した後もずっと自分たちの先生でいてくれて、いつでも自分たちを受け止めてくれる、そんな綾部先生にめぐり会えた子どもたちをとてもうらやましく思いました。

(四月十二日取材・聞き手/WSFジャパン・スタッフライター 山本尚子)